



運動会での素晴らしい子どもの姿

体育主任 本間 伸吾

晴れ渡る空の下、平成29年度運動会が盛大に行われました。結果は、白組の完全優勝でした。昨年度の赤組に引き続き、2年連続の完全優勝です。「勝負の世界は、厳しい」と感じた方もいるのではないのでしょうか。勝負に絶対はないからこそ、本気で取り組めるのだと思います。そんな運動会をとおして見つけた、素晴らしい子どもの姿を2つ紹介します。

① 勝つために全力をつくす姿

運動会は、「集団で勝敗を競う体育的行事」です。オリンピック・パラリンピックで日本中が感動したのは、勝利を目指して全力で戦う選手の姿に対してでしょう。参加することに意義があるという姿勢で選手がのぞんでいれば、あれほどの感動はないと思います。

運動会でも「絶対に〇組に勝つ!」「1位になる!」という強い気持ちが必要です。その気持ちがあるからこそ、全力で走り、力を出し切ることができ、運動会前の練習にも真剣に取り組むことができるのです。徒競走でたとえ1位になれなくても、順位を一つでも上げれば、自分の組に点数が多く加算され、組の勝利に貢献できます。そのように、勝つために全力をつくす姿が多く見られた運動会でした。

「勝つために全力をつくす」なかでも大事なことがあります。それは、「お互いの健闘を讃え合って戦うこと」です。正々堂々と戦って勝つことが本当の勝ちであるということをお忘れてはいけません。ラグビーでは試合が終わることを「ノーサイド」と言います。敵味方というサイドで戦っても試合が終わればノーサイドになって、お互いの健闘を讃え合います。スポーツの素晴らしい一面です。運動会では「エール交換」や「勝った相手への拍手」など、様々な場面で相手を讃え合う姿が見られました。とてもよい姿でした。

② 見えない仕事をがんばる姿

運動会は、人前に出るのが好きな子や運動が得意な子だけが活躍すれば、成功するものではありません。着順判定係や用具係などの様々な仕事を着実にこなす子が活躍してこそ成功できるのです。その仕事は、人に評価されることがなく、ただ単に大変なだけかもしれません。でも、必要な仕事です。「見えない仕事」を頑張るからこそ、価値があるのです。今年は、5・6年生が見えない仕事をがんばる姿が多く見られました。この姿は、必ず、1～4年生へと引き継がれていくと思います。

最後に、保護者の皆様におかれましては、温かいご声援ありがとうございました。運動会を通して成長した子どもたちの更なる成長を、これからも共に見守っていきましょう。



がんばった 運動会



「たのしかった うんどうかい」

1年 Tさん

一ばん楽しかったのは、とよさかおどりです。みんなとおどって楽しかったです。

「おねがい校長先生」は校長先生の色とあたるか、どきどきしました。あたらなくてくやしかったけど、はしったら3いになれて、うれしかったです。

お母さんたちにかっこいいところを見せてくれて、おうえんをがんばったら、声がでなくなつてつかれました。ゆうしょうができてすごくうれしかったです。

「がんばったうんどうかい」 2年 Yさん

本ばんの日は、とても晴れていてあつかったです。くもは一つもありませんでした。たくさんのお母さんお父さんがきていました。

さいしょにやったきょうみそうでは、はじめは1いでしたが、あとから二人においこされてしまいました。50メートルそうは、五いでくやしかったです。

おうえんがっせんでは、大きいこえがでてよかったです。こう学年になったらおうえんだんになりたいです。

赤はまけたけど、楽しいうんどう会でした。

「うれしかった運動会」 3年 Sさん

運動会でうれしかったことが二つあります。

一つ目は、ふしぎなポケット2017です。はじめて二位になれてうれしかったです。毎日体育館で練習していてよかったですと思いました。

二つ目は、80メートル走です。3年生の運動会では3位以内に入りたいと思っていたので、練習をがんばりました。そうしたら、本番で2位になれました。とてもうれしかったです。

来年は、80メートル走で一位になりたいです。

「今日は運動会」

4年 Hさん

5月20日(土)今日はついに運動会です。ぼくは80m走が1番きんちょうします。おうえん、きょうぎ、豊栄おどり、またまたおうえんなどが終わって、ついに80m走。ドキドキ感がたまりません。自分の番が来て、いよいよスタート。走っているときは、練習のときよりも横をちらちらと見てしまいました。でもゴールしたら・・・1位でした！ドキドキはおさまりました。

最後のけつか発表では、きょうぎもおうえんも白組が勝ちました。ぼくはうれしくて、はしゃいでしまいました。

「初めての騎馬戦」

5年 Wさん

ぼくの初めての騎馬戦は楽しかったです。

わけは、一度もみんなで行ったことのない騎馬戦で、ドキドキ、ワクワクしたからです。

けれど、僕たちはすぐぼうしを取られ、終わりました。でも、6年生が相手の大将の角を取りました。その時を見ていなかったの、ピストルが鳴った瞬間、負けたと思ったけど勝ちました。とてもうれしかったです。

「緊張した応援団」

6年 Kさん

ぼくは赤組の応援団長になった。決まった時は嬉しかったが、やれるかなという不安もあった。

でも応援練習が始まると、ぼくの思いを応援団のみんなが理解し、支えてくれた。その時に、赤組の応援はうまくいくと感じた。

運動会当日、最初は小さかった声も次第に大きくなっていった。結果は負けてしまったが、みんなのがんばる気持ちはよく伝わってきた。今は、白組のみんなにも、応援団の人たちにも、とても感謝している。

食育月間

～食育は毎日の食卓から～

栄養士 湊 聖子

6月は「食育月間」です。より多くの人に「食育」について理解してもらい、よりよい食習慣を身に付け実践してもらうための取組です。

私たちが生活していくうえで「食」は欠かすことはできません。生涯にわたって心も体も健康な生活を送るために「食べること」はとても大切です。ご家庭でもできることから取り組んでみてはいかがでしょうか。

○朝食をしっかり食べましょう！

食べる時間がない、食欲がないなどの理由で朝食を食べない人が増えています。朝食を食べないと、午前中は脳や体に栄養が補給されないため、体温が上がらず、元気が出ません。そして、イライラしたり、集中力がなくなったりしてしまいます。

朝食は、一日の生活をスタートさせる大切なエネルギー源です。早寝、早起きをして生活のリズムを整え、毎日朝食を食べるようにしましょう。

○子どもと一緒に食事作りや準備、片付けをしましょう！

親子での料理は、子どもの「食」への興味深め、好き嫌いをなくすきっかけにもなります。できることから体験させてあげましょう。大人は、子どもが包丁や火を使うと「危ない」「自分でやったほうが早い」とつい思ってしまいがちですが、子どものやる気を大切に見守ってあげてください。子どもには自分で伸びようとする力が備わっています。料理を通したコミュニケーションを楽しみましょう。

準備や片付けなどの手伝いは、家族の一員としての自覚を持たせ、役割をきちんと与えることで社会性や自立心を育みます。

○家族で食卓を囲みましょう！

近年、核家族化やライフスタイルなどの変化により、家族がそろって食事をする機会が少なくなっています。食卓は、単なる食事をする場ではありません。家族そろって会話を交わすコミュニケーションの場でもあります。食事のあいさつ、箸の使い方、食べる姿勢など食事マナーを伝えていきましょう。楽しい食卓は、子どもの心と体の栄養になります。家庭の都合や仕事が忙しい場合でも、できるだけ家族全員そろって食事をする機会を作りましょう。





図書館より 本の力、生きる力

司書 笹川 恵子

葛塚小学校では、全クラス週に1時間ずつ、図書があります。また、毎週水曜日には朝読書の時間が設けられています。給食を食べ終わった後や、プリントが終わった後など、少しの時間を利用した隙間読書も行われています。ボランティア「おはなしたまてばこ」の方々や、司書が行う読み聞かせのときは、低学年から高学年までどの子ども生き生きとした顔でお話を聞いています。

昨年度の読書旬間では、「うちどく（家庭読書）」に取り組んでいただきました。「うちどく」とは、“家族ふれあい読書”のことです。おうちの人に読み聞かせしてもらったり、家族そろって別々の本を読んだり、やり方はたくさんあります。テレビを消して家族一緒に本を囲む時間は、子どもたちだけでなく、おうちの方にとってもふれあいの良い時間になったと、温かい感想がたくさん寄せられました。

『子どもが絵本の「読み聞かせ」を必要とするのは、まだ字が読めないからではありません。子どもの身近にいる大人が、その子ども、あるいは子どもたちのために絵本を選び、読み聞かせてくれるとき、子どもは「お話をしてもらおう」喜びを味わいます。そこには、絵と言葉からなる絵本という「もの」に加えて、大人からの特別な心くばりそのものがもたらす喜びや安心感が含まれており、それが「生きる力」の基盤になっていくのです。』（「子どもの育ちを支える絵本」脇明子 著 岩波書店 より）

読み聞かせを通しておうちの人に語りかけてもらった温かい体験は、何物にも代え難いものです。おうちの人々の膝や声の温かさ、きれいな言葉。そして子ども時代だからこそ実際の体験のように心に生きて残る本の世界での体験。

本を読んだからといって、すぐに目に見える形で何か結果が出るものではありません。でも、必ず子どもの心の栄養となって、生きる力として蓄えられていくものだと思います。文字が読めるようになって、さらには高学年になっても、1日10分テレビを消して、家族で本を囲む時間を楽しんでみませんか。

『子どもたちが身近な人から肉声で絵本を読んでもらうとき、その時間は子どもにとって、あるいは大人にとっても、お互いの「ふるさと」になると思っています。ことに絵本が上質であり、心からそれを楽しむ絵本体験をもてたなら、その喜びはその子がこれから歩む人生の静かな光となり、また絵本自体もつらい時悲しい時にページをめくれば「おかえりなさい」とふるさとのように温かく迎えてくれる宝物になると信じています。』（月刊「こどものとも」福音館書店 2017年1月号折り込みふろくより 菅沢太一『「こどものとも」を届けて』より）